

自信や達成感を育てる運動会づくり

The sports day to nurture a sense of achievement and self-confidence

中 村 春 美

Harumi NAKAMURA

(福岡教育大学附属幼稚園)

(平成25年9月30日受理)

抄 録

幼稚園の運動会では、教師主導の運動会や幼児と一緒に作る運動会、小、中学校と一緒にやる運動会、地域協働の運動会など多様性があるが、その多くが自信や達成感を目的に掲げている。幼児に自信や達成感を育てるには、運動会の中でどのような運動遊びや取り組みを行うことが望ましいのだろうか。本研究では、竹馬やパラバルーンに取り組んだ5歳児の幼児の姿を観察し、幼児に「自信や達成感」を育てる運動遊びやその取り組み方を考察した。

I. 問題の所在と目的

幼稚園の運動会には、教師主導の運動会や幼児と一緒に作る運動会、小、中学校と一緒にやる運動会、地域協働の運動会など多様性があり、その園の考え方によって意義や目的、教師の考えも異なっていた。鼓笛隊や組体操を取り入れた教師主導の運動会では、幼児の可能性を引き出し、保護者から認められ達成感を味わうため、時間をかけて、時には厳しい指導も行っていた。幼児主体の運動会では、年長児を中心とした話し合いから主体性を引き出し、異年齢の関係を通して、年長児には自信や達成感、年中、年少児には年上に対する憧れや尊敬が育つように援助されていた。運動会に向けての取り組み方や教師の援助は異なるが、自信や達成感を育てることは共通していた。また、教師中心型の運動会と幼児主体の運動会を行う幼稚園にアンケートを行ったところ、目的の違いが見られるが、「自信や達成感を育てる」は両運動会共に多かった。幼稚園の運動会では、自信や達成感を育てることがどの園でも大切にされているようである。幼稚園の運動会で、幼児に自信や達成感を育てるにはどのような運動遊びや取り組みを行うことが望ましいのだろうか。

本研究では、平成24年6月～10月の筆者の実践から、運動会の取り組みの中でクラスの幼児たちの変化を観察、考察し、自信や達成感を育てることに必要な運動遊びや取り組み方を考察することを目的とする。

II. クラスの1学期の実態

A 幼稚園 年長児 男児16名、女児13名、計29名
・進級当初から、男児を中心に手が出るトラブルが多く見られる。
・友達の話を聞けず、一方的に自分の思いを通そうとする幼児が多い。

- ・友達に対して、傷つけたり、馬鹿にしたりする言葉を言う幼児がいる。
- ・クラスで悪い言動があっても、クラスの仲間同士で注意することがなく無関心である。
- ・静かに教師や友達の話を聞くことができない。
- ・自分の好きな遊びには熱中して取り組むが、友達同士でイメージの交流や役割分担が上手にいかず、遊びが持続できない。
- ・人前で話したり、歌ったりすることが苦手であり、自信がなさそうにしている。ふざける幼児もいる。

4月は担任と副担任の2名とで、トラブルに丁寧にかかわって幼児の話をしっかり聞いた。手を出すのではなく、自分の思いを伝えるには、言葉で伝えることを教えたり、促したりした。また、信頼関係をつくろうと幼児と一緒に思いきり遊んだ。しかし、1学期は、手がでるトラブルは減ったものの、あまり良い変化が見られなかった。

III. 竹馬ができるようになったことから自信がついた事例

A 幼稚園では、6月の保育参観で親子で制作した竹馬を運動会で全員が乗れるようになって発表するという取り組みを行った。幼児たちも昨年度の年長児が全員乗れるようになった姿を見て、自分たちもできるようになりたいと幼児と話し合っ、今年も挑戦することを決めた。

・A男の事例

竹馬が出来上がった直後は、みんな挑戦して遊んでいたが、なかなか乗れず、しだいに遊ばなくなってきた。その中で、A男だけが、毎日一人でもくもくと竹馬に挑戦し乗れるようになった。A男は、自分の思いを言葉で伝えることが苦手で、自分の思いが通らないと物を投げたり、大声で叫んだり、走ってその場から

逃げたりすることがあるが、自分の好きなことには、没頭してできるまで取り組む幼児だった。A 男の姿を見ていた 3 人の幼児たちも挑戦を始め、A 男は挑戦から 3 日間で 32 歩乗ることができた。教師は、A 男が毎日挑戦していたこと、挑戦を積み重ねて乗れるようになったことをクラスみんなが集まる場で伝えた。「A 男くんすごいね。」「そうよ A 男くん毎日しよかったもん。」「でも B ちゃんだって乗れるよ。」という言葉がクラスのみんなから出てきた。あまり友達を認めることの苦手なクラスであり、A 男についてはトラブルも多く、クラスの幼児たちからもからかわれていることもあったが、A 男を認める言葉がでてきた。しかし、A 男の頑張りを認めず、他の幼児だって乗れることをアピールした幼児もいた。教師は A 男の母親にも頑張りを報告し、大好きな母親からも沢山褒められ、この日から毎日毎日竹馬に取り組み、100 歩以上乗れるようになった。A 男は運動会の取り組みの中で、気持ちののらなかったダンスの練習には参加できずにいたが、竹馬の発表では喜んで参加していた。

・竹馬タイムの事例

9 月から弁当の後に竹馬タイムを行った。乗れる幼児もまだ乗れない幼児も一緒に 1 回は竹馬に乗ろうという時間である。その中では、教師、幼児同士かわりながら竹馬に取り組む姿が見られるようになった。竹馬に対して「僕できん。」と消極的だった C 男は 1 歩乗れると「僕 1 歩乗れた。でも D 君はまだ乗れんやろ?」と友達よりも早く乗れた優越感を感じていた。しかし、職場体験に来ていた中学生に竹馬を教えてもらおうと、「中学生の先生のおかげで僕は、10 歩できるようになった。」と感謝の気持ちをもてるようになった。

1 学期から乗れていた E 男が「小股で進むといいよ。」と F 男に教えると 17 歩できるようになった。次の日の弁当時間で F 男は「僕、竹馬タイム大好きなんだ。何歩できると思う?」とうれしそうに話す姿が見られた。

声が小さく、自分の考えや思いを伝えず友達にあわせる G 子が、まだ挑戦中の仲良しの友達に「私のお手本を見てて。」と伝えることもできていた。

・運動会当日

29 名全員が乗れるようになり、竹馬でグラウンドの中央から退場門まで全員が竹馬ののって退場した。H 男は、毎日挑戦していたが、なかなか乗れず、それでも毎日毎日乗り続けていた。練習では、5、6 歩歩いては、降りるを繰り返しながら歩いていたが、当日はほとんど降りることなく退場門まで歩くことができ、母親が感動して泣いていた。

保護者は、頑張った幼児たちにとメッセージを書き、竹馬で幼児たちが退場する際に、メッセージをアナウンスした。H 子は、母親からのメッセージを聞きながら「私泣きそう。」と言いながら歩いた。

竹馬のような運動遊びは、乗れたことが自分の体で

分かりやすく、しかも簡単でなく、難しくもなく、少し頑張ればできるようになる運動遊びではないだろうか。簡単なことがすぐにできるのでは達成感もないが、難しすぎても挑戦しようという気持ちにならない。5 歳児の発達に丁度良い運動遊びだからこそ、自信や達成感を育てるのではないだろうか。幼児たちは、竹馬に乗れたことで自信がつき、運動会当日、保護者を始め教師や年下の幼児たちの前で発表することで、更に誇らしい、自信や達成感が増したのではないだろうか。吉田氏、杉原氏の研究から「運動有能感が高いことは、自己主張、自己実現、運動遊びへの積極的取り組み、向社会行動といった園での行動を規定している」とある³。A 男のように自分の頑張りがクラスの仲間へとつながったことも自信になるし、友達に教えることができる自分に気付くことも自信へとつながるのではないかと考える。

IV. パラバルーンにクラスみんなで挑戦し、成功したことから自信や達成感につながった事例

筆者は友達に対してよく手が出たり、不快な言葉を口にしたりと仲間関係があまりよくない実態から、運動会のダンスではクラスみんなでパラバルーンに挑戦しようと考えた。大きなパラバルーンをクラス全員で持ち、いろいろな技をみんなの力でつくっていくことで気持ちをひとつにすることができるのではないかと考え、幼児にパラバルーンの DVD を見せた。「やりたい。やりたい。」「これ僕のお兄ちゃんもした。」と全員一致で決まった。

筆者はパラバルーンが虹色になっていたことから曲は「レインボー」という曲がいいのではないかと提案したが、男児を中心に「絶対嫌だ。」と言った。幼児たちの運動会なので、幼児たちの好きな曲でさせてあげたいと思い、幼児たちが希望したポケットモンスターの「ベストウィッシュ」という曲に決まった。



写真 1

・自分たちで振り付けを考えた事例

自分たちの好きなことしかしらない率直なクラスの幼児たちなので、曲の前半のダンスは思いっきり幼児に任せて一緒に振り付けを考えた。歌詞に合わせながら動きを幼児たちが出し合い、教師がまとめ役になりながらつくっていった。I 男は、運動会の思い出の絵を描く時に、自分たちで振り付けを考えて踊ったことが楽しかったと友達と一緒に踊っている姿を絵に表現した。

・J男の事例

J男はパラバルーンのドームという技（パラバルーンの中に全員入る）で、いつも中に入らなかった。理由を聞くと「怖い」ということだった。教師は怖くなく楽しいことや、中はきれいなこと等言葉かけを行った。その後の練習では、クラスの幼児たちがJ男が中に入っているか、心配そうに見たり確認したりする姿が見られた。ドームに入ると「J君いる?」「J君やったね。」とJ男に声をかけたり、「先生、今日J君入れたね。よかったね。」と教師に話しかけてくれる幼児もいた。J男は練習を重ねる中で、ドームに入れるようになった。

・運動会当日

幼児たちはバルーンを全員で持った時、いつもとは違う緊張感を感じているのが教師に伝わってきた。バルーンを引っ張る手に力が入っているのが伝わってきた。「洗濯」「テント」「帽子」「風船」「サーカス」「ドーム」と一つひとつの技が決まるたびに、「やった成功!」「練習でできなかったのにできた。」「J君入った。」と声をかけ合いながら行っていた。園児席に戻ってくると、「緊張した。」「全部成功してよかったね。」「風がなくて良かったね。」と教師や友達と話す幼児の姿があった。「感動しました。」と教師に伝える保護者の姿もあった。

・運動会の思い出の絵

運動会の終了後、運動会の思い出を絵に表現した。クラスの幼児の半分以上がパラバルーンの絵を描いていた。絵が描きあがった後で「どんな絵を描いたの?」と尋ねると「29人みんなできたのが楽しかった。」等「みんなで」という言葉が多く出てきた。K男は「パラバルーンの周りに29人みんな描いたよ。」とクラス全員を描き、ドームの中に入っている絵を描いた幼児は、「J君も入っているよ。」とJ男もドームの中に入った絵を描いた。

パラバルーンは、よく幼稚園の運動会で目にするが、幼児ではなく、バルーンが目立ってしまうため、これまではあまり取り組んだことがなかった。しかし、クラスの実態を考え取り組んだ結果、幼児の半分以上がパラバルーンを絵に表現したことから、幼児にとって満足できるものになったのだと考える。パラバルーンを成功した自信や達成感は、幼児たちが絵を描いた時に口にした「みんなで」という言葉から、自分ができたという自信と共にクラスみんなできたというクラスの自信や達成感へとつながったと考える。幼児にとって「このクラスにいて良かった」と思えることは、毎日の幼稚園生活を過ごす上で大切なことである。運動会は日常の保育とつながっている。クラスの実態をよく知り、課題を乗り越えるために運動会の内容を考えていくことでも、自信や達成感を育てるのではないかと考える。

V. 運動会後のクラスの実態

- ・手が出るトラブルが大きく減った。言葉での言い合いは同じ幼児を中心に多く、相手の気持ちを受け入れきれないことが多い。
- ・クラスの友達に悪い言動があると、自分の考えを伝えたり、注意をしたり、仲裁をしたりしようとする幼児が出てきた。
- ・友達に対して、傷つけたり、馬鹿にしたりする言葉が聞こえなくなった。
- ・人前で話したり、歌ったりする際に、大きな声でふざけずにできるようになってきた。

運動会後の幼児の姿は、仲間意識が高まり、クラスの雰囲気が大きく変わった。運動会をみんなでやりきったことや緊張を乗り越え、大成功し、保護者や教師等に認められたことが、幼児たちを変容させたのではないかと考える。

VI. 考察と今後の課題

幼稚園の運動会で自信や達成感を育てていくには、幼児が少し頑張ればできるようになる運動遊びやクラスの実態にあった運動遊びを選んでいくことが大切ではないだろうか。その中で、運動遊びを進めていく取り組み方や教師の援助の仕方も重要である。

竹馬の中では、クラス全員ができるようになるという目標を決め、友達の頑張る姿に刺激を受けたり、竹馬タイムを設定することで、教え合ったり姿が見られた。また、当日、保護者が頑張った幼児たちにメッセージを伝えるという演出の中で、幼児に感動を与えた。ただ乗れることだけを目標にし、厳しい練習を行い、人と比べるような言葉かけをすれば、やらされているだけになり、自信や達成感は育たなかったのかもしれない。パラバルーンでは、自分たちで決めた曲や振り付けで踊り、教師がクラスの実態を考えてクラスが一つになれるのではないかと思い幼児と話し合って決めていた。教師が一方的に曲や振り付けをつくり、パラバルーンをしても、幼児の満足感にはつながらなかったのかもしれない。教師が目の前の幼児にとって必要だということを示していきながらも、教師の一方的な思いだけでなく、幼児と共に取り組んでいくことが、幼児の自信や達成感へとつながっていくのではないだろうか。

本論文では、5歳児についての実践について考察したが、今後は3歳児や4歳児の実践についても考察していきたい。

¹ 中村春美 船越美穂 「幼稚園における運動会の現在」教育実践研究 第19号 2011年3月 p.221

² 中村春美 船越美穂 「幼稚園における運動会の現在」教育実践研究 第19号 2011年3月 p.223

³ 吉田伊津美 杉原隆 「幼児の運動遊びと有能感及び園での行動傾向に関する因果モデルの検討」日本体育学会大会号 51巻 2000年8月 p.203